



まごころ児童デイ



ハロウィンの衣装を着た子はだれ？

平成18年10月以降は新しい受給者証により継続契約をお願いしております。しかし、9月に一宮市に申請されなかった利用者にはこの受給者証が発行されておらず、10月からのサービスを受けられないケースが発生しております。受給者証支給決定期間を確認していただき早めの更新手続きをお願いします。

初めての金華山親子登山

～全員登頂成功～

快晴でぽかぽかした絶好の登山日和の10月15日、一宮駅には集合の30分も前から続々親子連れが集まり始め、親子12組とまごころスタッフ、ボランティアの総勢36名で、電車とバスを乗り継いで金華山へ向かいました。

改札口では恐る恐る切符を入れる子供達、そして電車から見える岐阜城があまりに高く見えて不安そうなお父さん。いつもの「まごころ」に行くと思ったら、バスに乗せられ状況が理解できずにパニックになってしまったT君など。

ちょっと不安を抱えながらも、10時過ぎには七曲登山口よりグループごとに出発。途中2回の休憩で、遅くなっているペアを皆で待ち「がんばれ、もう少し。」と拍手で励まし、昼には全員頂上へ到着。

涼しい風と野鳥のさえずり、そしておいしいお弁当に、疲れも吹っ飛び、黙々と食べていました。食後は自由行動で、野鳥に餌付けしようとして手を伸ばしてじっとしているOさん。岐阜城の展示物の鬼瓦を見て「ママみたい！」と口をそろえて言う父子。ずっとやりたかった帽子投げをして喜ぶK君。

下山はかけおりのように子供達は速いペースで下っていきましたが、装具をつけているIさんはボランティアさんに時々おんぶしてもらい、足が棒のように動かなくなってしまったH君も「いやだー。」と言いつつも何とか自分の足で下ることができ、お父さんと泣きながら抱き合っていました。

全員、賞状をもらうときには、さわやかな満足した表情になり、“また来年も登ろうね”と誓い合いました。

(スタッフTY)

親子で金華山登山

ひとりのけが人もなく開催できました事はご家族の方々とボランティアさんの協力のおかげだと感謝しております。ありがとうございます。



今回の登山は親子のふれあい登山を会が支援する事が目的でした。結果的に全員が頂上に立てて、全員無事に下山できたことは本当に良かったと思います。

来年以降も継続して、ご家族の意向にかなった支援ができるように参加者にアンケート調査を実施しました。結果をまとめますと、

およそ8割以上の方に良かったと感想をいただいた項目は「公共交通機関を利用したこと」、「スタッフの対応」それに「岐阜公園の賞状授与式」でした。

また検討項目としてあげられたのが「頂上での過ごし方」で観光客で混雑した場所での昼食は落ち着かなかったようです。ほとんどのご家族が次回の参加を希望されており、全員が秋の時期の開催を希望されました。

- また、反省点を挙げれば
 - ・無理に歩かせていないか
 - ・予防的対応（道順説明等）や 制御的対応（自傷等）ができていたか
 - ・ご家族の意向に添えたか
 - ・登山を楽しめたか
- これらの問題を検討して来年に繋げていきたいと思っております。

ミニデイだより



今が旬

秋本番。ミニデイのまわりの公園や、散歩道にはイチョウの木があります。風が吹いた日は、たくさんのぎんなんが落ちています。

「今日はぎんなんを拾いに行きたい。」とおっしゃる皆さんと一緒に、ビニール袋を持って出かけました。秋空のもと元気いっぱい。

「そこのぎんなんは取ってはいかんよ。お不動さんの前の木は、神さんがいるのでバチがあたるよ。」ぎんなん拾いもいろんな決め事があるのだと、若いスタッフは教わりました。

「素手で取ると手が荒れるよ。軍手をはめたほうがいいよ。」

「大丈夫！毎年拾ってんで慣れてる。」とFさん。

「今年はあるより大きないんで、ごはんに入れるとええかげん。」とAさん。

ビニール袋いっぱいになったぎんなんをスタッフが洗って干しておきました。特有のいいにおい？

一週間後昼食時に、まごころ秋の定番『九品地ぎんなんごはん』を調理担当の方が作って下さり、大喜び。ごはんの中でぎんなんがエメラルド色に輝いていました。

「旬のものを食べると寿命が延びるよ。」とNさん。

「いつまで生きるんかね。」と90歳になられたAさん。和気あいあいのもと、おいしくいただきました。

年を重ねられた皆さんは、今その時、お元気な笑顔がまさしく人生の旬かも知れません。旬の味覚を大事にいつまでもお元気でミニデイに来て下さいますように。

心っれづれ



子供に教えられた人を想う心
柴田明子さん

あわただしい毎日を送っている生活の中、ふと振り返って考えてみる事があ

る。私の父は高一の時に天国に旅立った。病気の時でも、まわりを気遣う父だった。葬儀の時に泣いて父の名を叫んでいた祖母に「おばあちゃんが泣くと、私も我慢できなくなる。おとうさんがいなくなった私の方がずっと悲しいんだよ」とつぶやいてしまった。

祖母は“はっ”と目を開き、“ぐっ”と口をつむり、それから一粒の涙も私に見せなかった。まだその頃は子に先立たれた祖母の悲しみを理解できなかった。

私の長男はダウン症である。出生後まもなく人の前では気を張っていたが、病院のベッドでとめどなく涙があふれた。偶然その様子を見ていた明らかに新任と思える看護師さんが「大丈夫よ。泣かないでね」と声をかけた。未婚の若い彼女の言葉は、その時の私には悲しみを深くするだけであった。

今思い返してみると、本当に祖母には申し訳ないとしか言えない。一緒に祖母の悲しみも共有してあげるべきだった。若い看護師さんも何とかして私を慰めようとして一所懸命に言った言葉だったのかもしれない。

自分を支えてくれる人に感謝をすること。

相手の立場になって考えること。発言もなく、意思表示も難しい我が子の子育てのなか、ハンディを持つ我が子から大事なことを学んでいるところなのかもしれない。

題字/澤田清敏さん

福祉とボランティア活動展を終えて



10月14日（土）、15日（日）開催された「福祉とボランティア活動展」に一宮まごころも参加させていただきました。

音楽に合わせてピアノを弾いたり、太鼓を叩いたり、来場者のみなさんと民謡を踊りミニデイサービスを紹介しました。来場者の方々に自由に思いを描いていただきました。ご来場ありがとうございました。